

「できない自分でも安心してさらけだせる場」

自分を取り巻く「視線」や「約束」からいったん自由になって、自分を「無」にする。

そうした時に、自分の中に「さまざまな感覚」が湧き出てくることを感じる。さらには、その感覚に身を委ねることができる。それが「場としての主体性」を生きている状態です。

そう考えるならば、自分が感じていることをそのままにさらけ出せること。それが、大事になってくるでしょう。

だらない自分をさらけ出せる。ありのままの自分をさらけ出せる。自然体の自分をさらけ出せる。さらけ出しても、怒られないし、責められない。存在自体が承認してもらえる。そんな感覚を、エリクソンは「基本的信頼の感覚」と呼びました。

出典：久保健太「主体性が湧き出ちゃう保育：一緒に笑って楽しんだ記憶（その３）」第３回（「保育通信」2025年２月号，No.839，p14）

・あなたの園で子どもたちや保育者が場に身をゆだねる経験はどんなときに起こっていますか？

・子どもたちが生きていることを深く実感するのはどんなときでしょうか？

・あなたの園の子どもたちには、ぼーっとする時間や空間がありますか？

水あそびってサイコウ!!



毎年恒例の水あそび!!

水あそびの最後は、10分ほど
ひなたぼっこをしています。

その日寺の J さんの様子はこちら！

先生みず! 107-!!!

水あそびが終わっても、大興奮の丁くん。

その数分後、Jさんのところに戻ると...



5-11! Jca) (保)

帽子で目しずを防ぎ、何れ重たにしない丁ん
の姿

最後は「最高に落ちた」と

笑って保育室に戻っていった

丁くんは普段からお調子者で

ワラスのムードメーカー。

その丁くんが「一人でも『無』にならなくて

太陽・風・セミの鳴き声…すべてを全身で
感じているように思いました。

同りでは、灰連としゃべっている子がいる中で

またに丁くんは、「 $\frac{E}{m}$ 」を生活しているように

感じました。

